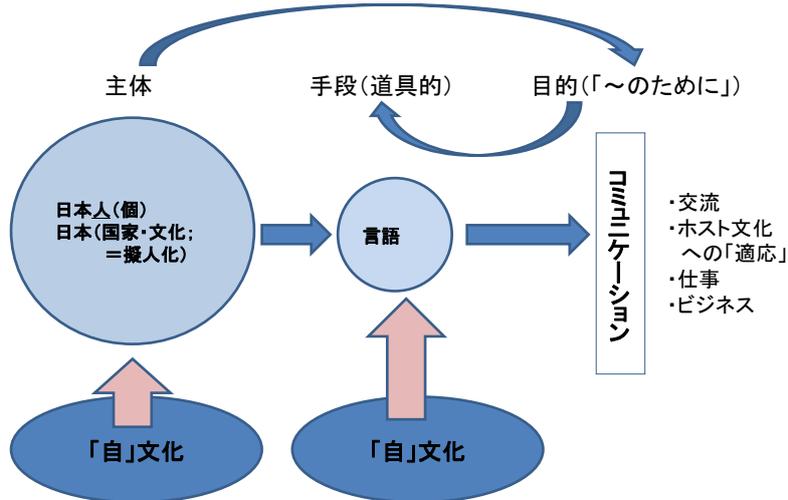


2010年度日本語教育学会秋季大会  
2010年10月9日 神戸大学 研究発表・パネルセッション  
「ことばは教えられるか—日本語教育における教育実践を問い直す—」

## 「英語を教える・学ぶ」の意味とは何か —言語教育の本質をもとに—

福岡教育大学  
吉武正樹

### 英語教育との共通点: 知識・技術ベース



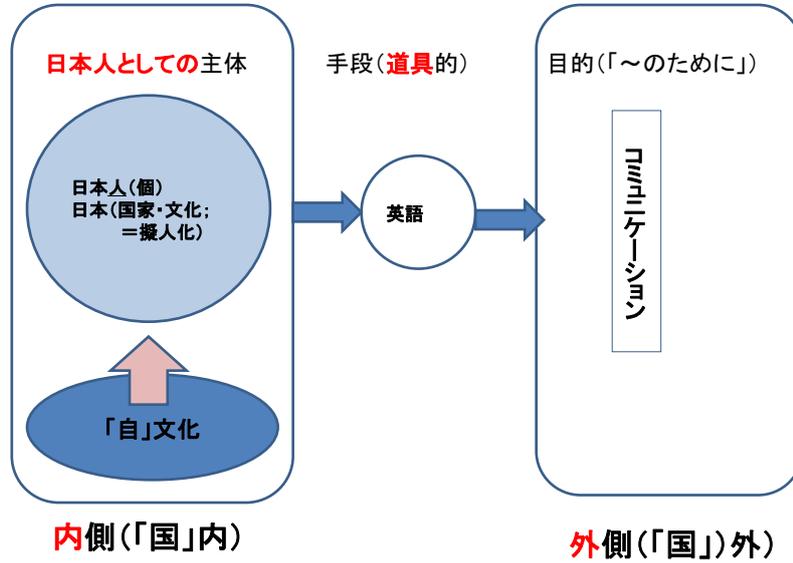
## 英語教育との相違点

- 英語は「外国語」という必修  
( \* 原則として「英語」の選択(??) )
- 「英語の必要性(言説レベル)」と「英語の不必要  
性(日常レベル)」とのギャップ
- 英語という言語の「国際性」:  
英語のタイプにより教えるべき「知識」が変化する

## 英語教育において「教える知」

英語のタイプ (吉武、2009a)	教授する「知識」のタイプ		
	言語の規則	文化的背景	コミュニケーションの 技術
英米追従英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英米を中心とした「NS」の英語(発音・文法・表現等)をモデル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 英米の文化を背負っている</li> <li>・ 相手文化への適応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4技能</li> <li>・ 英米を中心とした「NS」とのコミュニケーション</li> </ul>
国際語としての英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 脱英米化</li> <li>・ 多様な英語(日本英語など)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自文化の発信</li> <li>・ 他文化の理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 通用性重視</li> <li>・ 手段としてのコミュニケーション</li> </ul>
支配語としての英語	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 言語差別</li> <li>・ 階層化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文化支配(対英米文化)</li> <li>・ 精神支配</li> <li>・ 自文化尊重</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コミュニケーションの不平等</li> <li>・ 情報支配</li> </ul>

## 日本語＝主体＝内側 vs 英語＝客体＝外側



## 英語教育におけるコミュニケーション能力

	Communicative Competence	Communication Competence
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体 ←コミュニケーション→ 他者 (「私」がコミュニケーションする)</li> <li>主体 →コミュニケーション→ 目的達成</li> <li>人が「する」もの(キャッチボール・モデル)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>[主体] ←コミュニケーション→ [他者] (コミュニケーションによって自他が形成・変容する)</li> <li>コミュニケーション → 意味(ID、文化、共同体…)</li> <li>それを通して意味に「なる」もの(意味の生成)</li> </ul>
言語	<ul style="list-style-type: none"> <li>「私」がコミュニケーションするための手段(道具)</li> <li>意味の規則</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>認識のための色眼鏡</li> <li>意味の媒介</li> </ul>
私(達)	<ul style="list-style-type: none"> <li>コミュニケーションの主体(「する」人)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>間主観:他者との間に生じる「私」意識</li> </ul>
文化	<ul style="list-style-type: none"> <li>コミュニケーターが背負った(背景にある)文化的知識</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身体化された参照枠(更新可)</li> </ul>
共同体	<ul style="list-style-type: none"> <li>言語の背景に想定される言語共同体</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>コミュニケーション・ネットワークとして生じる共同体</li> </ul>
能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>4技能のコミュニケーション・スキル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>コミュニケーションを「分析・観察」できる</li> </ul>
パラダイム	<ul style="list-style-type: none"> <li>前近代的(流動性低い)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポスト近代的(流動性高い)</li> </ul>

## コミュニケーション教育と言語教育(1)

### Communication Competence

- コミュニケーションによって意味がどのように(再)生産されているかを批判的に読み取ることができる
- コミュニケーションの渦に自らを投げ入れ、公的領域で「活動」を行う

板場(2010)、吉武(2009b)、  
松本・師岡・臼井・吉武(2008)など参照

## コミュニケーション教育と言語教育(2)

- (1) 必修であるがゆえに、まずは「他者」と対峙すること(「窓」):
    - 「当たり前」が「当たり前」でなくなる体験
  - (2) 「冷めた」身体の解放:リズム、呼吸、パフォーマンスな身体性(齋藤、2003)
  - (3) 「日本的vs西洋的」から「近代的」なコミュニケーション・モードへ
    - 「日本的」:遠慮・察し、甘え、集団ベース、円環的、あいまい
    - 「西洋的」:説得的、競争的、個ベース、直線的、明確
- 「文化差」の問題から「モダニティ(「ポスト近代」vs「前近代」)の問題」への読み替え:コミュニケーションによる再帰性

## 参考文献

- 板場良久(2010)「新しいコミュニケーション能力」池田理知子編『よくわかる異文化コミュニケーション』ミネルヴァ書房。
- 齋藤孝(2003)『からだを揺さぶる英語入門』角川書店。
- 齋藤孝、斎藤兆史(2009)『日本語力と英語力』中央公論新社。
- 津田幸男(2006)『英語支配とことばの平等—英語が世界標準語でいいのか—』慶応義塾大学出版会。
- 松本茂・師岡淳也・臼井直人・吉武正樹(2008)「レトリック研究とコミュニケーション教育の接点を探る」『スピーチ・コミュニケーション教育』、5-40。
- 文部科学省(2003)『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画。
- 吉武正樹(2009a)「媒介言語としての英語」木村護郎クリストフ他編『媒介言語論を学ぶ人のために』世界思想社。
- 吉武正樹(2009b)「教員養成系大学におけるコミュニケーション教育はどうあるべきか」『スピーチ・コミュニケーション教育』、21-30。
- Kachru, B. B. (1992). *The other tongue: English across cultures*. Univ. of Illinois Press.
- McKay, S. L. (2002). *Teaching English as an international language*. Oxford Univ. Press.